

灯台とダイヤモンド  
～暗がりに蘇る唱歌～

<1>灯台のはなし

ある晩、夜中にトイレへ行きたくなくて目が覚めた。背筋を丸めて一階に降りて、用を済ませてまた寢床に戻る。微かに温もりが残る布団の中に潜り込み目を閉じると、突然歌詞が脳裏を駆け抜けていく。

「何故この歌が突然・・・」と思うのだが、どうしても消え失せてくれない。寝返りを何度か打つうちに、ようやく意識不明になり、次に気がついたのはタイマーで起動したラジオの音だった。

ところが次の晩も同じことがおき、その次の晩も・・・。なぜこの歌なのかわからないのだが・・・、と不思議に思いつつ古い歌集を開いて確認してみたら、色々面白いことがわかってきた。

色々わかってきたら、夜中にこの歌で目が覚めることはなくなった。

こお～れる～つき～かげ そら～にさ～えて

まふ～ゆの～あら～なみ～ やす～るこ～じま～

この歌は「灯台守」と言う歌で、小学校の頃に歌った記憶がある。歌を覚えた頃には歌詞の意味などわからずに耳で覚えて歌っていたに過ぎなかったが、高校生ぐらいになって歌詞の意味を解するようになってから、この詩の美しさに驚いた。

「凍れる月影 空に冴えて」と歌い出すと、北国の冬の海が脳裏に浮かんでくる。

「真冬の荒波 寄する小島」と続くと、さらにその海の中に浮かぶ小島が描けてくる。そして、「思えよ 灯台守る人の」と聞き、孤島の灯台を守る人のことだと解ってくる。

「尊き 優しき 愛の心」と結ばれると、「おー、そういう歌なのか」と納得。

二番に入ると「激しき雨風 北の海に」「山なす荒波 猛り狂う」「その夜も 灯台守る人の」と進み、「尊き誠よ 海を照らす」で終わる。

冒頭から終曲まで、ひとつひとつのフレーズが示す映像をつなぎ合わせていくと、映画のような見事な映像の連写が感じられてくる歌詞で、映画監督の絵コンテを並べて見せられているような、迫力ある情景描写の歌詞である。

この歌はイギリス民謡に、勝承夫（かつよしお）が日本語の歌詞を付けたと言われているが、原曲はアメリカで作曲された「It came upon the midnight clear」という讃美歌らしい。

この原曲に日本語の歌詞を付けた歌はほかにも存在することもわかった。

大和田健樹作詞の「旅泊」では、こんな歌詞になっており、情景の相違がさらに面白い。

磯の火細りて 更くる夜半に 岩打つ波音 ひとり高し  
かかれる友舟 人は寝たり たれにか語らん 旅の心  
月影かくれて 鳥啼きぬ 年なす長夜も 明けに近し  
起きよや舟人 おちの山に 横雲なびきて 今日ものどか

<2>ダイヤモンドのはなし

こんな歌が登場する晩もあった。。

こ～んごうせ～きもみがかずば～ た～まのひかりは そわぎ～らん

ひ～ともまなびてのちにこそ～ まことのと～くはあらわるれ～

とけいのは～りのたえまなく めぐるがご～とくときの～まも・・・

小学校4年生か5年生の頃に教わった歌のように記憶している。「ダイヤモンドだって、原石から気が遠くなるような長い工程で磨き上げられて宝石になる」というような歌詞の意味を聞いた記憶もある。



その時にはさほど深く考えることもなかったが、高校生になって古文を解するようになってから歌詞を読み直してみたら、意味もよくわかり歌詞に重みのある歌であることがわかった。

一、金剛石も磨かずば 玉の光は添わざらん

人も学びて後にこそ 真の徳はあらわるれ

時計の針の絶え間なく 巡るが如く時の間も

光陰（ひかげ）惜しみて励みなば いかなる業（わざ）かならざらん

二、水は器に從いて その様々になりぬなり

人は交わる友により 良きに悪しきになりぬなり

己にまさる良き友を 選び求めてもろともに

心のこまにむち打ちて 学びの道に進むべし

それから何十年も経って、突然頭に蘇ってきた歌詞から再びこの歌を調べ直してみたら……。

一番は「金剛石」という詩で、二番は「水は器」という詩。作詞は昭憲皇太后（明治天皇の皇后）で、明治 20 年に華族女学校に贈ったもの。当時この学校の教官だった奥好義（おくよしいさ）が作曲してこの学校の校歌になった。



華族女学校はこの皇后の命により明治 10 年に神田錦町に設立された学校で、華族子女の教育のために設立され、明治 22 年に永田町に移転。

（左写真：学習院女子中学部 web から借用）

その後平民子女の入学も許されて明治 39 年に学習院女子部になった。

作曲した奥好義は宮内省の雅楽師で、洋楽の教育にも従事していた。この曲のほかに「婦人従軍歌」「勇敢なる水兵」「天長節」などの歌も作曲した。

子どもの頃の記憶が脳の奥の方に残っていて、何かの拍子に浮かび出てくるのだろうか。

そして、いくつかのことがわかって一安心すると、浮かび出て来なくなる。魂の居所が定まると出て来なくなるという幽霊の話にも繋がるものなのかもしれない。

それ以上に、突然昔のことが明瞭に蘇ってくるのは、自分が歳をとったせいなのかもしれない。

以上